

拂つたのは、長篠の柵外にて織田軍の鐵砲に撃れた甲州軍の如く、次第に攻勢の鋒を鈍らし、特に狂暴なブエルダン奪取戦に於てブロックの守勢を利とする卓上論をして名を成さしめた。デョッ。フル元帥の執つた壁を堅くして秦兵に當つた廉頗長平の作戦を學んだ計畫は、時日の遷延と共に倍有効となり、終に聯合軍に米國が参加するに及び、平時に於て獨逸兩國に對し三四倍する工業の製造能力を以て、全力を盡して兵器其他の軍資を集め

國 栖 の 名 義

無數の大砲、タンク、自動車、飛行機を以て其疲憊せる陣地を攻撃することとなり、終に獨逸父子をして長篠戰敗に彷彿たる潰敗をなさしめた。我々は慘澹たる戰雲に鎖された世界が横暴なる軍國主義の潰滅により再び平和の天地となつた新年を迎ふるに當り、其の經過を追跡して今日あるを得せしめたるマルヌ戰捷の意義を高調して、聯合國の幸運を祝せんとするものである。

(大正七年十一月十九日稿)

文學博士 喜 田 貞 吉

大和吉野の山中に國栖といふ一種の異俗の人民が居た。所謂山人ヤマトヒトの一種で、里人さとびととは大分様子の違つたものであつたらしい。應神天皇の十九年に吉野離宮に行幸のあつた時、彼等來朝して醴酒を

献じた。日本紀には正に『來朝』といふ文字を使つて居る。彼等は人となり淳朴で、常に山菓こみかを取つて喰ふ。また蝦蟇かまを煮て上味とする。其の土は京(應神天皇の都は高市郡の南部大縣の地)よりは東南、山を隔て、吉野河

の河上に居る。峯峻しく、谷深く、道路狹嶮であるが爲に、京よりは遠からずと雖、古來出て來た事が稀であつた。是より後屢來朝して、栗菌や年魚の類を土毛として獻上するところある。踐祚大嘗會等の大儀に、彼等が列して、所謂國栖の奏ととなへ、土風の歌舞を演ずる事は儀式上著名な事であつた。大正御大典の時にも、伶人が國栖代として、之を奏したと承つて居る。

久須といふ名義に就ては、北陸方面の蝦夷を高志人と云ひ、樺太アイヌを苦夷と云ひ、千島アイヌを『クシ』といふと同語で、蝦夷の事であらうといふ説がある。自分はクシ・コシ・クイ皆同語で、『蝦夷』といふも、もとは亦『カイ』の音譯であるべきことを承認し、蝦夷名義考と題して、歴史地理（三十一卷二號及び四號）で之を論じて置いた。併し國栖に至つては、如何にも其の名稱は似て居るが、彼等の風俗其の他、到底蝦夷らしくないといふ内容の研究

から、嘗て土蜘蛛論（歴史地理九卷三號）でも、彼等の異民族たるべき事を論じ、蝦夷名義考に於ても、國栖の名の説明を保留して置いた。其の後名義考の補考を著はすに及んで、簡單に之に及んで記述したが、今や更に本誌の餘白を借りて、之を纏めて見たいと思ふ。

自分は思ふ。『久須』はもと『クニス』と呼んだもので、國栖又は國主・國樞・國巢など書いたのは、其の呼び聲のまゝに文字を當てたのであらう。此の事は本居翁も既に古事記傳に於て疑うて居られる。

吉野の國東、昔より久受と呼來たれども、此記の例、若し久受ならんには「國」の字は昔くまじきを、此にも輕島宮の段にも、又他の古書にも、皆「國」の字を作るを思ふに、上代には「久爾須」といひけんを、や、後に音便にて、「久受」とはなれるなるべし。されど正しく久爾須といへるこ物に見れば、姑く舊のまゝに、今も「久受」と訓り。

とある。學者の慎重なる態度として、敬服に値す

る。成る程「國」の字を「ク」の假字に用ふる事は如何にも無理だ。故吉田博士は、其の地名辭書吉野國標の條下に、諸國に多き栗栖、小栗栖の名は、『クス』の轉りにあらずやと疑はれ、紀伊國栖原浦に久授呂宮あり、社傳に國栖人の吉野より來りて祭れるものとなし、今國主宮と訛るといふ事實を引かれた、又其の國主神社の條下には、

蓋國主は栗栖の訛なり。湯淺村顯國神社も此神を勧請せるにて、國津神とも唱ふ、……名所圖會云、「國主神社は古くより久授呂宮と云ひ傳ふ。久授は國栖にて、呂は助語なるべし。寛文中の古記に、上古吉野の國栖人來りて此地に祀る所といへり。○按に、國主・栗栖・國栖の三語は古人相通じて同義となせる如し。續紀「天平神護元年、名草郡大領紀直國栖」と云ふは、紀伊國神名帳「名草郡正一位紀氏栗栖大神」と相因む所あらん、云々。

とある。自分は本居翁と、吉田博士との兩説に賛意を表して、聊か之を補つて見たいと思ふ。

國栖人の民族的研究の發表は他日を期する。併し彼等が蝦夷族ではないといふ事は、十年前と同

じく、今もなほ之を信じて居る。常陸風土記には國巢を俗に土蜘蛛又は八掬脛といふとある。而して越後風土記には、此の國に古く八掬脛といふものが居て、土雲の後だとある。而して其の屬類は風土記編纂の奈良朝の現實に於て、なほ多く存じて居るとある。當時蝦夷の尙盛んな越後に於て、蝦夷とは別に土蜘蛛の後裔と目せらるゝ人民が多く存して居たのであつた。此の一事のみでも、彼等が蝦夷とは違つた民族であることは承知せねばならぬ。随つて如何にクスの名がコシ・クシ、クイ、カイに似て居ても、それは偶然的の暗合であつて、名義は之を他に求めねばならぬ。

自分は遺物遺蹟の研究上、國栖人を以て、やはり隼人や、肥人や、出雲民族や、海部・土師部など言はれたものと同じく、石器時代から彌生式土器を使つた、先住土着の一民族であると考へて居る。彼等は古傳説に於て、國津神又は地主神とし

て傳へられたものである。土着民の事を國人くわいじんなどと呼ぶ事は、諸所に例が多い。國栖或は其の文字のまゝに、『クニスミ』即ち前々から國に住んで居た人の意か。若くは國主(古事記體 神天皇條)とある如く、『クニスシ』即ち、地主の民族の義ではなからうか。『栖』の字が『スミ』の假名に使はれた事は、出雲大社なる天日隅宮を、天日栖宮とも書いてあるので察せられる。此の點から云へば、『クニスミ』といふ方に重きを置きたい。『スミ』が『ス』になるのは、紀伊國伊都郡なる『スミダ』(隅田)八幡宮を、『スダ』と呼んで居るなど、其の例が多い。或は『クニスミ』といふ地名の諸所に多いのは、此の『スミ』の語がたまく保存せられて居るのかも知れぬ。

『クニス』が約まつて『クス』になる最好の適例としては、『ハニシ』(土師)が『ハジ』になり、『クヌガ』(陸)が『クガ』になつたものを提供したい。稍不適當ではあるが、『オロガム』(拜)が『オガム』、

『ミツマタ』(水派)が『ミマタ』(用明)となる様な類に至つては、際限なく多い。

『ナ』行の音と『ラ』行の音とが相轉するに至つては、其の例殊に多い。『ツヌガ』(敦賀)が『ツルガ』『イナニ』(稻荷)が『イナリ』、『ツカニ』(東荷)が『ツカリ』(周防)、『タカラベ』(財部)が『タカナベ』(高鍋) (日向) 『ラダニ』(小谷)が『ラダリ』(信濃)、『オラニ』(男鬼)が『オラリ』(近江) など、まだ尋ねれば、幾らもあらう。而して是が多く地名であることも面白い。此傍例のみから類推しても、國栖くにすゐと栗栖くりすゐが同語源であるとの吉田博士の説は承認したい。實地に就いて見ても、栗栖、小栗栖、栗瀬くりせなどといふ地は、玖珠(郡後)、久豆(伊勢)などと同じく、如何にも嘗て先住民の殘存しさうな場所ところに多い。それから思ふと、本居翁が疑はれた萬葉十の歌の、『國栖等の、春榮わかばな摘まんとしめの野の云々』の、『國栖等』の三字の如きも、仙覺點の通り

『クニスラ』と訓むべきもので、『クスドモ』と訓むのは、古意でないかも知れない。飯田武郷翁は日本書紀通釋に於て、夫木集の。

遠つ人、吉野のくくにくすくいくつくしくかくき、往へぞまつる年の始に

の歌を提供せられて、『こはたしかなる例ありてよめるにや』と言はれたが、やはり是も『クニス』

で差支ないものと思はれる。

『クス』がクシ、コシ、カイなど、同語源であるか否かは、自分の民族論に大きな關係のある問題であるから、名義其のものは一向つまらなくとも、他日の發表の豫備として、こゝに管見を吐露して博識諸賢の叱正を希望する。

ポツダム の 思 出

文學士 長 壽 吉

ポツダムはサンスウシ宮殿(莫愁宮)の在る所、サンスウシ宮はフリードリヒ大王の永眠の床の在る所である。余は大王の平生を、ポツダム見物の思出の中に説かむとするのである。大王の内治征戦は能く人の説く處である。大王時代の海外交通は、他日余之を書かうと思ふ。今茲には、唯機智

や、狡獪を覺ゆる、其事蹟の間に在りて、大王の平生が恰も余には、大王の好んで吹いた笛の音の様に、其遺響を傳へて來るものあるを、記さうと思ふのである。

ポツダムを訪づるゝは、秋の日に如くはなし。一碧秋霽の光、菩提樹の黄葉に照る美しさに、詩